

## 論文の内容の要旨

フセヴォロド・イヴァーノフの『クレムリン』と『ウ』  
 - 「新しい人間」についての2つの小説

中澤佳陽子

フセヴォロド・ヴァチスラーヴォヴィッチ・イヴァーノフの長編小説『クレムリン』(1930)と『ウ』(1933)は、イデオロギー統制という政治的な原因により1980年代になるまで出版されなかった作品である。そのため、従来イヴァーノフは、中編小説『バルチザンたち』(1921)、『装甲列車14-69号』(1922)等の初期作品によってのみ評価されることが多かった。本論文では、未だ本格的な研究のない『クレムリン』と『ウ』を分析し、1920年代前半に書かれた初期作品とは異なる作品世界を明らかにし、文学史上のイヴァーノフの位置を再検討することを課題とした。また、作者がつながりのあるものとして構想したこの2つの長編小説の共通点を明らかにすることも課題とした。

第一章ではまず、イヴァーノフの生涯の概略を述べ、彼の初期作品がどのようなものであったかを説明し、イヴァーノフがそこからいかに作風の転換を図ったかを説明した。イヴァーノフの初期作品は、自身が生活していたロシアのアジア地方(シベリア)における革命を描いたものが多い。そして、イヴァーノフは革命の中に自然の荒々しい力の発露を認め、その力を描いた。また、自分の熟知している方言を盛り込んで独特の文体を作り上げた。イヴァーノフのこの文体は、文学史上「装飾的散文」と呼ばれている。文体に意匠を凝らした散文として位置づけられる。「装飾的散文」は1920年代前半に隆盛を見たものの、その後文壇の人々から、地方における独特の風俗を装飾的な文体で描くことよりも、より普遍性を持った文学を創造するべきだという要請がよせられる。そして、この要請の中には、19世紀文学や前世代の象徴主義等の伝統から学ぶべきだという主張も含まれていた。イヴァーノフはこのような要請を背後に、1920年代後半から作風の転換を図り、人間の心理という問題を中心に扱うようになる。1925年から1927年にかけて執筆された短編を集めた作品集『秘中の秘』は、『クレムリン』、『ウ』の前段階といえる作品であり、このような作風の転換がはっきりと読み取れる。

イヴァーノフは『秘中の秘』で、人間の無意識を描く際に象徴という手法を用いている。作品において個人の心理を中心に扱ったこと、また、無意識を描く際に象徴という手法を用いたことは、イヴァーノフが「伝統から学ぶ」という周囲の要請にこたえて、19世紀文学や象徴主義の伝統に回帰したことが考えられる。ただし、イヴァーノフは作品において伝統への回帰を行っただけでなく、同時代的なものも積極的に取り込んだと考えられる。『秘中の秘』では、個人の生(本能)が社会の法とぶつかり、法を侵犯してしまう状況が描かれている。このような状況を描く際に、イヴァーノフはフロイトの自我論を援用したと考えられる。イヴァーノフが作品を掲載していた雑誌で、1920年代半ばにフロイトの自我論をめぐって議論が交わされた。また、息子の回想から、1920年代にイヴァーノフがフロイトを読んでいたことが明らかになっている。

また、個人の心理の問題はイヴァーノフにとって、それ自体が重要であったというよりは、個と集団という時代の焦眉のテーマの中で扱うという企図があったと考えられる。この点を第二章で考察した。この章では、『秘中の秘』の中に、一種の「全一」の思想が表現されている作品があることを指摘した。1920年代後半は第一次大戦計画が企図され、実行に移された時代である。イヴァーノフが作品の中で「全一」の思想を表現したのは、個と集団の問題が先鋭化した時代であったからこそ、と考えられる。後の1940年代頃に書かれたものがあるが、イヴァーノフが個人主義を否定し、全体主義を肯定する趣旨の文章を残していることから、作家がこの問題に強い関心を持っていたことが分かる。

また、『秘中の秘』の分析によって、イヴァーノフがフォードロフ、ソロヴィヨフ、ベルクソンの思想の影響を受け、作品において「全一」態を達成する「新しい人間」という思想を表現していることを指摘した。回想や日記によって、イヴァーノフがこれらの思想家の著作を読んでいたことが明らかになっている。ことに、死に抗う精神の象徴としてフォードロフが語った寺院のイメージは、1920年代後半のイヴァーノフの作品に繰り返し登場しており、イヴァーノフが不死の思想に強く惹かれたことが考えられる。

「新しい人間」というテーマと、それを表す象徴という手法は、『秘中の秘』でこのように登場し、『クレムリン』、『ウ』へと引き継がれることとなる。この点を第三章、第四章、第五章で明らかにした。

第三章では、『クレムリン』における2種類の「騎士」のイメージを分析することによって、作品の中で、「全一」態を達成する「新しい人間」というテーマが表現されていることを指摘した。『クレムリン』には聖ゲオルギーの竜退治という紋章と、そのヴァリエーションとして、熊に乗った人間の紋章という2つの紋章が登場する。2つの紋章のうち、聖ゲオルギーの紋章はエゴイスティックな個人の自我を象徴し、熊の紋章は共同体的愛を象徴している。また、この2つの紋章がヴァリエーションという関係に置かれていることは、個人のエゴイスティックな本能を变形、もしくは転換することにより一種の「全一」態が達成されるという思想を象徴的に示している。また、このような「全一」態を達成するロシアの「新しい人間」は、西欧の「新しい人間」のヴァリエーションであるということも、2つの紋章によって示されている。

第四章では『ウ』における2種類の「王冠」のイメージを分析することにより、同様のテーマが表現されていることを明らかにした。『ウ』では「アメリカの皇帝」の王冠、そしてその相似物である救世主キリスト寺院のドームという2種類の「王冠」が登場する。このうち、「アメリカの皇帝」の王冠はエゴイスティックな個人の自我を、救世主キリスト寺院のドームは個人を超えた共同体としての精神を象徴している。

この章ではさらに、叙述の形態から、『ウ』において「集団的創造」という理念が扱われていることを述べた。『ウ』はイヴァーノフが「集団的創造」の理念に関心を示した時期に執筆されている。イヴァーノフの庇護者的存在であったゴリキーは集団で「歴史」を創造するという理念の下、『工場』や『内戦の歴史』といった本を出版した。これらの本の創作のあり方は、工場の労働者や内戦の参加者たち自身に書かせ、職業作家達が編集し、作品を「芸術化」というものであった。このようなゴリキー主導の「歴史」の本の執筆事業に、イヴァーノフは参加し、「集団的創造」について肯定的な発言をしている。

『ウ』では「作者の介入」とでも呼ぶべき部分で、知識人である職業作家(「編者」と呼ばれている)と、非知識人であるエゴール・エゴールイッチという登場人物が共同で作品を創造している状況が描かれている。この2人の「作家」は時には一体化し、時には争いながら、作品を物語っている。また、『ウ』では、先行する文学、哲学等のテキストの引用から成る注釈が冒頭に置かれている。これは、作品が作家個人によって生み出されたというよりは過去の集団的英知によって生まれたものであるということを示していると考えられ、やはり「集団的創造」の理念と関係があると思われる。

論文要旨 (4000字)

第五章では、『ウ』における2枚の服のイメージを分析した。『ウ』では、チェルパーノフが着ているポケットのたくさんついた自転車着と、彼がアメリカの大富豪の服と間違えて探し求める古い服、という2枚の服が登場する。このうち自転車着の方は表層の自我を、アメリカの大富豪の服と間違えて探し求める服の方は深層自我を象徴している。この服探しのプロットは、「エゴイズムを追及した後、共同体の原理に回帰する」という思想、また、性愛の浄化という思想を象徴的に表現している。

そして、第四章、第五章で行った2つの王冠の分析、2枚の服の分析、そして作品中の幾つかのエピソードから、『ウ』でも『クレムリン』同様、「全一」態を達成するロシアの「新しい人間」は、西欧の「新しい人間」のヴァリエーションであるという思想が表現されていることを指摘した。

結論としては、次のことが挙げられる。まず、『クレムリン』と『ウ』にはテーマ上、手法上で大きな共通点がある。2作品は、作品の中に2つのイメージを配置し、1つにエゴイスティックな個人の自我を象徴させ、もう1つに共同体的精神を象徴させるという手法において、共通している。

また、『クレムリン』と『ウ』では共に、性の本能を浄化して「全一」態を達成するという思想が表現されている。同時に、このような「全一」態を達成するロシアの「新しい人間」は、西欧の「新しい人間」のヴァリエーションである、という思想も2作品で共通して表現されている。

『クレムリン』と『ウ』が初期作品とはどのように異なるか、という問題に関しては次の点が挙げられる。人間の深層心理に焦点をあて、人間の精神世界を象徴によって表現した、という点で、この2作品は初期作品と比較し、象徴主義の伝統に近づいていると言える。